

今回は残念ながら最優秀賞は見送られましたが、創作文部門の最終選考に残った作品は、それぞれに持ち味のちがった作品がそろい、とても楽しく読めました。

優秀賞に選ばれた「シティー・タルト」は、画家を目指しながらも一向に芽の出ない姉と、パティシエールを目指して着々と修業を重ねてきた妹をめぐる物語を、姉の視点から描いた作品です。田舎の母が作って送ってきた桃だけの、なにかの儀式のような早朝の朝食の場面から始まるのですが、抑制の効いた文章で、主人公の姉の心情が切々と伝わってきます。こうした、言わば「静」の場面に対して、妹が登場してからの「動」の部分、そしてタルト作りの息を呑むような場面と、全体の中での緩急のバランスがとても巧みで、原稿用紙 50 枚近くの長さを見事に使い切っていました。ただ、この設定からしてもっと複雑な確執がありそうな姉妹の関係があまりにすんなり流れてしまうことに対する違和感が、複数の審査員から出されました。また、部屋の様子や、周りの街の様子など、主人公をとりまく外部の光景をもう少し丁寧に描くことによって、主人公の心象風景がさらに奥行きを持って読者に伝わってくるのではないか、と思いました。

佳作の「小学生休みます」は、不登校になった小学校六年生の茜が、しばらく田舎の祖父のもとに預けられ、祖父が経営する保育園の「お手伝い先生」として日々を送るという物語です。こういう設定の話は、なによりもストーリー展開にリアリティが求められますから、実は中学生・高校生が書くのは、とても難しいと思います。例えば、この作品でも、園児が 60 人いるのに先生の数少なすぎるなど、不自然な点はいくつかありました。ただ、幼い子どもたちとの交流を通して、六年生の少女が自己回復していく物語をここまで書き上げた構想力には見るべきものがあると思いました。

奨励賞の「狩人の想い」はファンタジーでなかなかドキドキさせてくれた作品でしたが、上記二作ともう一つの佳作作品「記憶の手帳」はいずれも日常的な物語で、ファンタジーやライトノベル的な作品が多かったこれまでに比べ、今回の特徴でもあったと思います。また他にも、ロボットものすぐれたアイデアの作品や、歴史ファンタジーなどもあって、冒頭に書いたように、応募作品の傾向が広がっていることは、なによりうれしいことでした。

一方、論説文については、率直に言ってひとつのパターンをなぞっている感じの文章が多く、もう少し「自分の言葉」で語ってほしいという印象でした。なにか「正解」があるわけではないのですから、自分なりの切り口を探してほしいと思います。